

# 風土



秋  
扇  
神  
蔵  
器

大宮八幡宮 二句

笛の音や月の出潮の神遊び

菩提子拾ふ武蔵八番一之宮

水を買ふ台風の目の中にゐて

注文の雅印のとどく萩と月

一節や竹の器の新豆腐

いくたびも星を映して水澄めり  
墨するや秋三尺の児のごとく  
底紅や村の重石の大藁屋  
木綿ゆ注し連めや羽黒に雲の峰育つ  
ひとすぢの蚊遣を焚いて子規の留守  
つくつくし土葬の子規に声とどく  
墓抱いて子規を煽げり秋扇



# 竹間集

同人作品



女郎蜘蛛

小野寺節子

待宵草荒野で何を憶ひぬる  
雲の峰のつびきならぬ世話人会  
女郎蜘蛛顔に似合はぬ言葉吐く  
新聞テレビ見て不快感蟻地獄  
リーダーの会合終へて氷菓舐む  
夏百日追憶ばかり追ひかけり  
風邪寝して怠けて仕舞ふ盆供養

無題

小林清之介

けぶる花火犬の飲み水かけて消す  
こは眩しバードグマン忌の秋揚羽  
終ひ餌に残暑雀の見え隠れ  
（ハクシツン 昭和九年一月一日）  
手の甲を青筋くねる秋暑かな  
秋風に頬杖つけば無精ひげ  
糸のころの大振り小振り父子のごと  
医者通ひ行きも帰りも法師蟬

襖絵

田村すゝむ

炎天を来て入る岡本太郎館  
かなかなや標本箱にピン数多  
半円の膝の高さに水を打つ  
襖絵（襖絵の字）の雁を閉ぢ込む夏座敷  
滝落ちて真白き水の柱立つ  
遺されて見る今生の蓮の花  
水辺まで亡妻を抱きて流灯会

稲の花 瀬戸 悠

涼しさや鯉の泳げる絵封筒  
盆の月仰臥の胸を照らしけり  
胸中の山河照らせり盆の月  
墨東や白粉花に日暮くる  
九年母は創刊号の表紙なる  
蠍座源氏庭に近く白桃したたらず  
冒險の叶はぬ齡稲の花

秋 風 塩田 博久

静まりて絵画教室烏瓜  
犬小屋に犬の表札赤まんま  
居間の灯を消してテレビの大文字  
剪らねばの徒長枝あまた秋徼雨  
本尊を拝して帰る萩の中  
友ら逝きて黄泉親しかり秋の風  
良き友はみな黄泉に在り天の川

沖の沖 代田 青鳥

爪立ちて沖の沖見る終戦忌  
田園とオーケストラと敗戦忌  
置き去りのやうな墓石秋早  
芋嵐村を見下ろすハイウエイ  
ポケットの底のざらつく残暑かな  
道三頼業山城の城転がして芋の露  
ひとり入るインカ・マヤ展秋早

風の先達 関根 洋子

アイガールの壁に魅入るも晩夏かな  
草引いて草にしめりや土用東風  
つぎの世は星になりたき螢かな  
あかときの音なき空に百合ひらく  
飾られて大和坐りの西瓜かな  
さはさはと風の先達魂迎  
母の魂父にしたがふ月の道

# 山車祭

## — 野沢しの武 —

馬の目に青き海峡さくら散る  
木蓮は北を向く花文を書く  
亀鳴くや右を左といふもならず  
電話かけそびれしことも春愁ひ  
投函の戻りは空手夏燕  
閉づる力失せて崩る白牡丹  
ちちははより長き付合ひ露煮る妻  
野暮用に筍飯を逃したり  
父の日の夜空突いたる櫂の木  
尿りの跡大雪溪に残し去る

太宰忌の夕日止むるおんこの木  
老婆の頭いたはり嚙んで夏神樂  
茅の輪更け男のみなる巫女溜  
螢点り新しき闇生まれけり  
明易の途切れ途切れに父の夢  
十人はをり山車作る男たち  
山車作る牛車の陰にもう一人  
山車小屋の棚に並びて武者の首  
諸肌脱ぎ男が祭太鼓打つ  
北国のかくまで晴れて山車祭

# 山河集

同人作品



神蔵器選

夕日呑む滝オホーツクの海へ落つ  
ラベンダー蜂が蜜吸ふ後に摘む  
直線道路の先は国後島雲の峰

幸福駅

廃駅に褪せし伝言赤まんま

北海道李

一人占むエルムの森の晩夏光

猿島の日暮は烏瓜の花

平田紀美子

どぶ板バザール青鬼灯も出てゐたり

馬追や夜どほし灯る救急口

八月の横須賀海軍カレーかな

秋涼し香水瓶に野の花を

秋早子に逆らはず従はず

松井ふみ

落合絹代

追ひつけぬ人の背を追ふ雲の峰  
炎天にぶつかつてゆく波の音  
夏大根ほどの辛みの娘の電話  
何はとも今を大事に曼珠沙華

方丈に百の座蒲団蟬しぐれ  
浅田光代

秋風や明恵上人耳落とす

暈の目膝に八月十五日

阿波踊一連過ぎる橋の上

大文字火の移りたるまなかな

鈴木庸子

つめあうていたたく真菰筵かな

くるぶしに草の風受く魂送り

育てゐる言葉ひとつや秋扇

盆踊りすつぽり亡者頭巾かな

順どほり並ぶ墓碑銘や盆迎ふ

郷 土

工藤ミネ子

福藁を子の鉢巻に肩車  
神籬の闇焚き込んで柴灯祭  
なまはげの右手幣みてぐら塞ぎけり  
児が泣きて語気ゆるめたる生身なもみ剥はぎ  
福の豆帽子に闇を剥がれ来る  
耕せる湾一望の畑かな  
ひらひらとぼたぼたと雪さき彼岸  
はくれんに藤蔓の枷動き出す  
群青の湖の風足出熊猟  
饗さるる煮物の中に露の姥  
一陣の風の甘しや苜蓿  
葱坊主妣のぬさうな畑かな  
松籟の弓張る時の飛花落花  
萎むにはしぼむ力や夕牡丹  
大空を降して次の田を掻けり



第 30 回桂郎賞俳句部門入選

蛇を見し昨日の田面雨叩く  
まろみたる田の一枚に糯の苗  
風神に捕まつてゐる花羊蹄  
鳥海山の腕の広し黒揚羽  
水口の辺り摩り切れ青田風  
稜線の雪溪鞍を掛くると  
薬師嶺を根城としたる雲の峰  
山下る水の勢ひ今年竹  
杉の皮剥ぎ七月の野戦めく  
梅雨の市泥鰯の水を網に捨つ  
輪に入る妣を真中に盆踊  
母さんの赤いエプロン案山子かな  
抱きしめて抱きしめて了ふ雪囲  
越冬の毛虫のくぐる四脚門  
蒼鷹ふるさとの山在りにけり

さざなみ

浅田 光代

みづうみの揺れやまぬ鴨来りけり  
逆立ちて鴨とんとんと波均す  
鴨ねむる州のやはらかな石となり  
屈まりて柴漬の蝦選つてをり  
水揺すり籠の鮎の藻を落とす  
蒲団干し草の渚へ階二段  
みづうみのあはきひかりの蕪引く  
葭に触るるさざなみの音冬座敷  
魎竹の日暮れて叩く鴨の骨  
竹生島いま木枯にもまれをり  
みづうみへ雪しきりなる観世音  
北比良の大いなる影魎を挿す  
貝殻の山につままづく涅槃かな  
みづうみへ傾くつくし摘みにけり  
白粥にあたたまりある蓮如の忌



第 30 回桂郎賞俳句部門入選

比良八講まづ法水が乗船す  
法螺の音や比良にひとすぢ雪残り  
比良八講吹き戻さるる紙塔婆  
みづうみの霞より閑伽汲んできし  
比良八講護摩火ねぢれて湖へ  
比良八講阿闍梨つむりを撫でくるる  
花びらに浮き出て鳩のまなこかな  
花見船舳をおほきく迂回せり  
菜の花や蕘のうへを湖西線  
みづうみのかすかに満ちて初燕  
朽舟をつらぬく葭の青さかな  
巡礼の船待てば鮎きらめきぬ  
石段に白衣あふるる薄暑かな  
巡礼に蛇を追ふなど言はれけり  
初夏の藍の壺なる奥琵琶湖

◇特別作品（抄）◇

## 池上本門寺

及川 澄江

今朝秋の靈山橋を渡りけり  
文月の門前通り香匂ふ  
総門の光悦の書や涼新た  
束の間に風のそよぎて花芙蓉  
秋高し此経難持坂登りけり  
小鳥来る日蓮聖人説法像  
楼門の仁王の拳鴟鳴けり  
大堂の未完の竜や秋気澄む  
閉ざさるる靈宝殿に秋の蝶  
旅終へて秋の扇をたたみけり

# 風土独語／神蔵 器



炎天へ車より足下ろしけり

根岸 善行

都会の炎天は特にすざまじい。道路や屋外の駐車場などは灼け、日光を照り返し、空は白熱して一片の雲の翳さえない。作者は車から下りようとして足を外に出したのであるが、そこは焦げつのような炎天の中であつた。まさしく実感であろう。

炎天にぶつかつてゆく波の音

松井 ふみ

朝日カルチャーの席題で出句された句である。句会をしたあと句会の緊張がそのまま持続され、集中して作句が出来るためか、僅かな時間でも不思議とよい句が出来る。

夏の海は暦の上では立夏以後立秋までであるが、イメージとしては紺碧の海に立つ土用波、入道雲が連想される男性的な海である。空はよく晴れて白熱した炎天、意外と高い荒波が炎天にぶつかつてこうこうとどろかせている。炎天が鳴るのか、逆巻く波が鳴るのか。女性とは思えないほど豪快に大景を詠んで見事である。

早稲かをるわが青春の大糸線

中沢 三省

作者は新潟の生まれ、新潟大学医学部を卒業されている。大糸線は長野県松本と新潟県糸魚川間を走っている。作者は学生時代に登山やスキーなどでたびたび大糸線を利用、松本から大町、白馬方面に出掛けたと聞いている。大糸線には作者の青春がいつぱいつまっているであろう。

ところで、句意は説明するまでもないので、ここで固有名詞の使い方について少し書いておきたい。

固有名詞を詠みこむ場合、固有名詞はその句の主題ではないということ、従つて固有名詞そのものを前面に詠つたり、説明をしたりしてはならない。固有名詞はあくまで句の背後にあつて、一句の主題を盛り上げ、広げたり深めたりして大きく生かす重要な役割を持っているのである。それゆえに、作者はよくよく使う固有名詞を理解し熟知することが大切である。いくぶんか読者側にも責任はあるが、全く読者に理解を得られない固有名詞は使わなにか、若干の「註」をつける必要がある。

次に固有名詞を使う場合の大切なことは、その名詞が句によく馴染むこと。特に語感、一句のリズムと安定性である。

掲出句は大糸線というなつかしく清澄な語感、快いリズム、そして安定感は申し分ない。季語の「早稲かをる」を心に主題である「わが青春」を見事に演出した。

(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

炎天へ車より足下ろしけり 上尾

根岸 善行

七夕の竹の高さに風の鳴る

バス去りて野の広がりし秋日傘

新しき靴音こつと秋に入る

十万光年のはづれの星涼し

納豆の糸ひきちぎる大暑かな

横浜

保田英太郎

諦めしバスに間に合ひ汗やまず

学校の裏のため池晩夏光

病棟をつなぐ回廊初あらし

秋麗や未婚女性と水族館

捕虫網 新幹線の中 通る

高槻

浅田 光代

ソーダ水はなしの接穂見つからず

落柿舎の土間の堅さや柿青し

荒草に日のぬくみある花火かな

大花火触れなむと子の爪立ちぬ

早稲かをるわが青春の大糸線 手塚

中沢 三省

昭和史を生きて仰ぎぬ盆の月

生き甲斐は一合の酒生身魂

流灯の川埋め尽くす広島忌

鎮魂の日を重ねつつ葉月過ぐ

七夕やメールにマタイ伝十九章

横浜

安永 圭子

青芒ゆつくり回る水車かな

万葉記念館出でて大和の赤まなま

蟬時雨女は耐ふること多し

言葉飲みアカバの浜に大銀河

青柿や村の消防訓練日

越谷

市村 義夫

星合や幼馴染といふ奇縁

新涼や犬に賢き目鼻立ち

桔梗咲く浅草若手大歌舞伎

むづかりし赤子寝入るや遠花火